広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第38号　2010. 3〉

生徒の学習ストラテジーのきめ細かな記述と分析

― 特に英単語習得と文法理解の改善を目指して ―

村上　直子　　松尾　砂織　　柳瀬　陽介　　中尾　佳行

１．はじめに

本研究は，生徒が英語の基礎的な学力をどのようにつけているかを，具体的に生徒の声を拾い上げて記述分析することにより，英単語が覚えられない生徒や英文の作り方がわからないといった生徒に対してのよりよい指導法や教育内容開発へ結びつけていくことを目的としている。広島大学附属三原中学校英語科（以下，英語科）では，「自己表現の創造を支える実践的なコミュニケーション能力」とし，コミュニケーションの中で，基本的な語彙や文構造を活用できるための必要な基礎学力をつけるための教材および学習指導の開発を行ってきた。

これまで，いくつかの学習指導法を実践する上で，回数を重ねるごとに向上の見られる生徒と，そうでない生徒がいることを感じていた。同じ量を，同じ時間をかけて学習しても習得によっては差があり，時には時間を多く費やしていても，同じ所でつまづきの多く見られることもある。

本年度は，基礎的・基本的な知識の習得として，英単語の習得をあげ，正確に習得できる生徒と苦手な生徒は，覚え方に何か違いはあるのか，何か特徴があるのか，ということを，生徒たちからの声を集約し，分析をしたい。

小学校段階で外国語活動が導入され，「話すこと」「聞くこと」という音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成される。「読むこと」および「書くこと」については，中学校での指導の一層の充実が求められる。指導する語数も，900語程度から1200語程度へ増加される。学習指導要領の「第２章　３　指導計画の作成と内容の取り扱い（１）の（オ）」では「語，連語および慣用表現については，運用度の高いものを用い，活用することを通して定着を図るようにすること。」とあり，さらに，「単に機械的に記憶させるのではなく，あくまで具体的な場面や状況で適切に用いるようにして定着を図ることが極めて大切である」とある。授業の中で「聞くこと」や「話すこと」の言語活動を行い，定型文や連語などを定着させた後，その時活用した語や連語を，「書くこと」へつなげていく際でも，綴りを正しく書ける生徒と，そうでない生徒に差が出てくる。しかし，正しく書けなくとも，その語の発音近い綴りは書いているのである。音と綴りの関係をフォニックスなどで学習しても，語には例外が多く見られる。その例外に出会ったとき，生徒たちはどういう方法で覚えているのか，ということをきちんと把握したい。そしてそれを，今後の指導改善に役立てていきたい。

２．研究の対象および方法

（１）研究対象生徒とその実態

2009年度の８年生83名を対象とし，アンケートまたはインタビューによる聞き取りから，生徒たちの実態を把握する。この学年は，中学入学当初，アルファベットはフォニックス学習法を取り入れて指導している。教材は，「Penmanship & Phonics（松香フォニックス研究所・正新社）」を使用した。生徒たちはアルファベットそれぞれの音の読み方や，２文字子音，連続子音などを学習し，日常生活で触れているであろう英語（色やスポーツ名）などの文字と結びつけて学習した。さらに，その後の授業でも，フラッシュカードなどを用いて単語学習をする際には，このフォニックスで学習した読み方を思い起こさせたりした。

７年時に，授業の中で好きな活動と，一番身につけたい技能についてのアンケートをとった。

昨年度11月に行ったアンケートの結果では，生徒の好きな活動は図１にあるように，均等に分かれており，どれかに偏るといったものがなかった。しかし，図２を見ると，一番身につけたい技能としては，「話すこと」の次に「書くこと」が多かった。「話すこと」に関しては，本学園では，留学生や海外からのゲストと英語で直接的コミュニケーションをとる機会が多くある。そ

Naoko Murakami, Saori Matsuo, Yosuke Yanase, Yoshiyuki Nakao; Description and Analysis of Learning Strategy for Junior High School Students

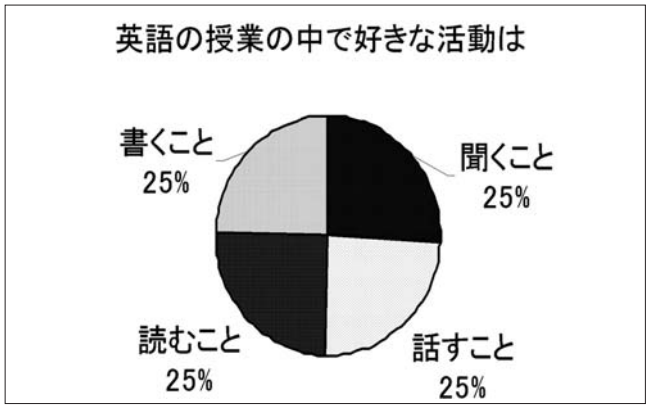

図１　好きな活動（７年生時）

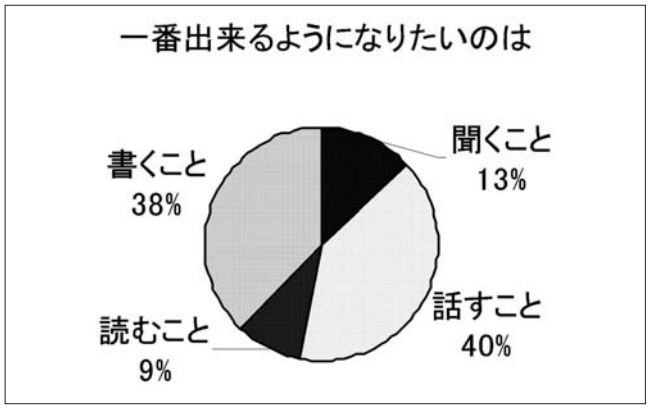

図２　一番身につけたい技能（７年生時）

して，活動後ごとには「もっと英語で話したい」という感想を持つ生徒が圧倒的に多かった。そして，書く活動に関しては，国際コミュニケーションの授業で海外の生徒と手紙交換をする活動や，英語絵本を作る活動なども多少影響しているかもしれないが，圧倒な声として，「テストで単語をスラスラ書きたい」，「覚えていてもすぐに綴りを忘れてしまう」，「言いたいことが頭に浮かんでも，声には出せても書けない」といったところから来ているのではないであろうか。

そういった学習状況と意識の実態が背景にある。

（２）研究方法

今年度は，言語活動で使用した語を書くことで定着させるため，単語テストを定期的に実施した。その中で，６月に単語の読み方に関するアンケートも同時に行った。アンケートには，（１）この単語をどう読むか，といったものと，（２）授業で発音，意味の理解を既に学習した単語を挙げ，それらを書くときはどのようにして覚えたか，という２種類の問いを用意した。（１）は例えばfigure, quilt, whole, sighなど，日常生活の中でよく耳にしたり，発音されると意味がわかったりする語，もしくは意味がわからなくても既習の単語から音が推測されるであろうと指導者が予測した語を用いた。（２）はmountain, weighなど教科書で学習した語を使用した。

３．結果と考察

（１）単語の発音について

生徒たちのアンケート回答をもとに，結果を以下の表１～８にまとめてみた。

表１　figureをどう読むか

figureはどう読むか	人数
(A) フィギュア，フィギアなど，と書いている	10
(B) フィガー，など，ローマ字読みまたはフォニックスをもとに読み，正しい発音に近い形で書いている	22
(C) ファイガー，フィグラなどローマ字読みまたはフォニックスをもとに読んでいるが，正しい発音からは遠いかたちである	16
(D) ファイヤー（fire）など，既存の単語と誤認	5
(E) 無回答	26

表２　quiltをどう読むか

quiltはどう読むか	人数
(A) キルト，クィルトと書いている	8
(B) クイルト，など，ローマ字読みまたはフォニックスをもとに読み，正しい発音に近い形で書いている	19
(C) クワイアット，クイートなどローマ字読みまたはフォニックスをもとに読んでいるが，正しい発音からは遠いかたちである	12
(D) クゥワイエト（quiet）など，既存の単語と誤認	11
(E) その他	2
(F) 無回答	29

figureやquiltの語は，後で正解を発音すると，ほとんどの生徒が聞いたことのあると挙手した。意味も知っていた。しかし，文字だけ見て意味まで分かったのは（A）の生徒だけであろう。(B)，(C) は意味までは分からないが，文中に出てきたら，頭の中で発音しようとしながら読んでいると思われる。(D) は全く違う語として判断しているので，文や句の意味自体を誤解したり，理解できないであろう。

表３　wholeをどう読むか

wholeはどう読むか	人数
(A) ホール，ホウルと書いている	6
(B) 既存のwho（フー）に加えてleをルと読んでいる	21

(C) 既存のwho（フー）に加えて, leをレと読んでいる	2
(D) ホエール（whale）など, 既存の単語と誤認	6
(E) その他	19
(F) 無回答	27

wholeは, 最初のwhoの部分を, who（誰）の読み方にしている生徒が圧倒的に多かった。「語尾にeがつく場合は, 1つ前の母音がアルファベット読みになる。そして語尾のeそれ自体に音はない」というフォニックスのルールは, 学習している。leをルと読めてはいるが, whoの読み方の印象の方が強いためか, このルールが定着はしていないことがわかる。

表4　sighをどう読むか

sighはどう読むか	人数
(A) サイと書いている	31
(B) サイン（sign）と誤認	12
(C) サイト（site）と誤認	5
(D) その他	10
(E) 無回答	23

これはhighの応用として読めないかどうか出題したが, 31人の生徒が読めていた。しかし, この語は（B), (C）の生徒のように, 他の語と誤認している生徒が多いことが特徴だった。

表1～表4を見ると, 初めて見る語を正確に音にすることは難しいと思われる。そして, もしその語が見たり聞いたりしただけならば, その綴りを見ても, 自力で読んでみて, 判断することはむずかしいと思われる。

（2）単語の覚え方について

次は, 単語を正確に書くには, どうやって頭の中でその語を発音しながら書いているのか, という問いを出した。発音や意味をほぼ全員が理解しているであろう語を出題した。そして, どのように覚えているかを, 筆記テストの（A）高得点群（30人), (B）中得点群（28人), (C）低得点群（25人）の3つに分けてみた。

表5　mountainの綴りの覚え方

mountainの覚え方	A(高)	B(中)	C(低)
①モウンタイン	16	18	8
②マウンティン	6	3	0
③その他の覚え方	6	5	6
④無回答	2	2	11

表6　juiceの綴りの覚え方

juiceの覚え方	A(高)	B(中)	C(低)
①ジュイス	9	5	4
②ジュイセ	5	6	5
③ジュース	8	8	7
④その他の覚え方	6	9	7
⑤無回答	2	0	2

表7　smallの綴りの覚え方

smallの覚え方	A(高)	B(中)	C(低)
①スマール（スマル）	13	17	13
②スモール（スモル）	13	9	4
③その他の覚え方	2	2	5
④無回答	2	0	3

表8　weighの綴りの覚え方

weighの覚え方	A(高)	B(中)	C(低)
①ウェイグフ・ウェイグヒ	5	6	4
②wei＋g（ジー）h（エイチ）	6	1	3
③ウェイ	6	4	1
④その他の覚え方	11	12	3
⑤無回答	2	5	14

表5～表8を通して, 共通的に生徒は書くときには正しい発音とは別に, ローマ字読みをしている生徒が多かった。発音しない文字は, 子音のいわゆる音読みをしており, gをグ, hをフというように音をあてて読んでいるか, アルファベットで読んで, 暗記しているようである。単語を覚えるために, 独自で作りだした音は,「案外忘れず覚えている」という声が多かった。その他の単語についても, 綴りをどうやって覚えているかをたずねてみると, 次のような声があった。

○高得点群の生徒達の声

・単語を覚えるのはローマ字読みです。
・eaでイーとか, ouでアウとか, 文字と音を結びつけて覚えている。
・手にしみ込むぐらい書いて覚える。単語を頭の中で唱えながら書いて, ghとかはここは間違えやすい, と注意しています。
・日本語風に発音して書く。例えばイントゥレスレスティング＝interestingという風に。
・自分の分かりやすい読み方に変えて覚えている。
・7年の初めになったa, b, c＝ア, ブ, クを読むやつを利用している。
・授業の単語を覚えるタイムを競う時, 自然と覚える。

○中得点群の生徒たちの声

・何度も書いて覚えながら, それでも覚えられなかっ

たら無理矢理覚える。例えばthroughだったら，th（ス）ロウグッという風に。ghは何となく「グッ」と読めるので，覚えている。
・自分で音を作る。例えば，right＝ライグハト
・ローマ字読みで覚えるけれど，何度も書いている内に何も考えなくても書けるようになる。
・語呂合わせ（ディフィクルト＝difficult）
○低得点群の生徒たちの声
・なんとなく感覚で覚える。
・長い単語は区切って覚える（mounとtain＝moutain）
・night＝ニグエイト　おもしろい覚え方だけど，どうやって書けるようにしている。
・例えば，churchだったら，ch（チ）とch（チ）の間にur（ウラ）と覚える

表１～表８，および生徒たちの声から，多くの生徒はローマ字読みで綴りを覚えていることがわかった。そして，高得点群の生徒ほど，音と文字を一致させることができ，覚え方にフォニックスルールも取り入れている。独自で綴りを覚える方法を作りだしているが，中得点群の生徒が自分の編み出した覚え方では，誤った綴りを書く場合がある。低得点群の生徒は単語を視覚的にとらえて覚えようとするものが多く，さらに何となく，というようにあいまいな表現が多い。

（３）生徒への聞き取り

低得点群の生徒が，単語テストの追試を実施した後，その中の生徒と，普段の単語の綴りの勉強の仕方について，簡単なインタビューをした。その記録である。

○＝英語教員　　◇＝生徒A
○単語は普段どうやって覚えているのか
◇何度も紙に書きます。でも覚えられません。
○初回のテストは低得点だが，追試験の時は２回目で合格できるね。それはなぜ。
◇最初のテストは，勉強はしますが，不合格とあきらめています。書けないからです。追試験は，同じ単語がでるので，その日までにその単語を必死で書いて覚えます。
○例えば頭の中でどういう風に音に出しているの。
◇tomorrowだったら，ティーオーエムオウ……とアルファベットで読んでいます。確かrが２つあったかな，というのも覚えておきます。
○それで覚えるのは，かなり記憶力が必要なのでは？
◇その方が正確に書けるからです。
○「トゥモロゥー」とは読めない？
◇英語は読めます。でも「明日」を英語にしなさいとあれば，頭ではティーオーエムオウ……です。
○では，英語を見て意味を答える問題は？
◇感覚で覚えています。たぶんこんな形は，こんな日本語の意味だった……とか。
○どういう意味？
◇例えば，このテストで言えば，riverだと，最初と最後にrがあれば「川」だと覚える。
○では読めないのでは？
◇でも，「川」だから，「リバー」という発音だったかな，と思い出します。
○ずっと覚えていられる？
◇忘れることがほとんどです。だからまた勉強します。

生徒Aは，比較的努力家で，熱心な生徒である。しかし，なかなか正確に綴りを書いたり，文構造を理解したりすることが非常に難しい。勉強量は，多いのだがなかなか正答に結びつかない生徒は毎年数名いる。どこでつまづいているのか，どの段階で理解できていないのかはそれぞれ違うが，個に応じた指導をするための把握はぜひ続けていきたい。そして，その指導方法の種類を増やしたり，生徒たちの声を聞きながら工夫改善をしていきたい。生徒Aは，ローマ字読みを紹介すると，「そういう覚え方もあったのか。」と驚いた様子だった。単語指導の際，綴りの覚え方は「たくさん書く」「声に出しながら書く」という指導だけでは，このような生徒たちは，正確に書けるようにはならないのではないだろうか。

４．おわりに

本研究の結果より，以下のことが明らかになった。
・生徒たちは，英語の発音と，綴りを覚えるときの音は，別物にして記憶している場合が多い。
・生徒たちは，綴りを覚えるときの音は，ローマ字読みを多く使っているが，自分で覚えやすい綴りのルールを独自で作り，当てはめる。

以上のことから，生徒たちは，指導者が「英語はカタカナ読みでなく，聞こえるようなかたちで英語らしく読む」といっても，それは読むときに適用し，英単語を書く時にはローマ字読みなどを頼って書くことが多数である，ということがはっきりした。綴りを書くときの覚え方は，共通したものが多い。中～低得点群の生徒が，綴りを誤るのは，覚え方を確立できていない，もしくは，作り出した覚え方のルールから，２通り以上の綴りが考えられるためではないかと考えている。しかし，低得点群の生徒でも，指導法を工夫すれば，現段階

よりも書けるのではないだろうか。インタビューをしての感触である。

これからは, 小学校で外国語活動が導入され, 音声に慣れ親しんできた児童達が中学校に入学してくる。中学校になって読み書きが入った時, どのような文字と音を結びつける指導が, どのくらい「正確に書く」ことに影響していくのであろうか。本研究では, 学習者である生徒が, 綴りに関して正確に書けるような方法を自分で見つけ出して書いている, ということがわかったが, その方法には差があり, 綴りの正確さには差が出てきている。これからも, 中～低得点群の生徒へ効果があるような綴りの指導法の工夫や, 中学校３年間を通しての覚え方の改善を目指したい。

引用（参考）文献

1）文部省：『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説　外国語編』pp. 6 －20, 文部省, 平成11年９月

2）松尾砂織, 村上直子, 深澤清治, 松浦伸和：『中学校英語科における評価規準と評価方法の開発』, 広島大学学部・附属学校共同研究紀要第34号pp.205-212, 2006

3）松尾砂織・村上直子・深澤清治・松浦伸和「速読力を養う英語科の教材および学習指導開発」,『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』, 第37号, pp423-428, 2008